

戊辰戦争とトコトンヤレ節



* 軸物類80「都風流トコトンヤレぶし」

解説

旧幕府勢力と新政府勢力は、1868（明治元）年1月の鳥羽・伏見の戦いから翌年の箱館五稜郭の戦いまで、1年半にわたる内戦（戊辰戦争）を繰り広げました。左の写真は、そのときの新政府軍の氣勢を描くとともに、兵士を鼓舞した「トコトンヤレ節」です。作詞は長州の品川弥次郎、作曲は大村益次郎とされていますが確証はありません。その一節、

「宮さま宮さま 御馬の前の びらびらするのハ何じゃいな
トコトンヤレトコトンヤレナ／ ありゃ朝敵征伐せよとの 錦の御
はた（旗）じゃし（知）らなんか トコトンヤレトコトンヤレナ」

ここで、「宮さま」は、新政府の総裁で東征大総督でもあった有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王をさします。また、絵の右方に描かれた日月の旗が、新政府軍が「官軍」であることを象徴的に示す「錦旗（錦の御旗）」です。

じつは公家岩倉具視は戊辰戦争に先立ち、薩摩藩の大久保利通と長州藩の品川弥次郎に、錦旗の調製を委嘱していました。旗は岡吉春の指揮で、山口で密かに作られました。



* 「防長新聞」明治38年3月7日記事（新聞文庫Y防長新聞26）に、錦旗制作に関する関係者の回顧談があります。（写真右）

* 旗の調製を指揮した岡家の記録の写しが、「錦旗調製一件」毛利家文庫 75維新記事雑録90にあります。